

---

# **私が彼と結婚した理由**

彩香

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私が彼と結婚した理由

### 【Zコード】

Z6176Z

### 【作者名】

彩香

### 【あらすじ】

主人公 橋田亞紀<sup>はしだあき</sup>は新しつづみ町に引っ越ししてきた。高校は私立のつづみ学園に入り、そこで濱沢<sup>なみさわ</sup>龍<sup>りゆう</sup>に会い恋に落ちる。だけど龍は亞紀に隠していることがあった。

それはある一枚の写真に龍と一緒に写っている女の子  
龍は何を隠しているのか！？

## 新しい友達

みなさん、こんちは 私の名前は橋田亜紀はしだあき

私はつぐみ町に引っ越ししてきてもう長い月日が経っています  
私はもう32歳結婚をして子供もいます

今、思い出せばいろいろなことがあったなあって思い出してしまつた  
子供『お母さん』

亜紀『どうしたの?』

子供『お母さんとお父さんどうやって知り合ったの?』

亜紀『それはねお母さんとお父さんが高校生の時に知り合ったの』  
子供『へ～お母さんとお父さんどうやって付き合つて結婚したか教えて』

亜紀『え～』

子供『教えて、教えて』

亜紀『しょうがないな』

亜紀『お母さんは中学卒業してからつぐみ町に引っ越ししてきたの  
高校は私立のつぐみ学園に入学するの』

そうそうこんな感じだったなあ

亜紀「はあ～・・・今日から学校かあ・・・・。」

亜紀「友達できるかな」

私は重い足どりで学校に向かつた  
やつとの思いで学校についた

亜紀「うわ～緊張してきた」

先生「新1年生はこちらでクラス表を見て自分の教室に行って下さ

ーい

亜紀「クラスかー・・・・・・私、何組かなあ!？」

亜紀「別に中学校の時の友達はないから何組でもいいけど  
そして、クラス表の前に立つて自分の名前を探す。

亜紀「えーと、高橋、高橋・・・・・・」

亜紀「ん！？」

私は自分の名前を探す途中、田に入った名前があった。

亜紀「何て読むのかな・・・男子の名前みたいだけど・・・・・・  
沢・・・龍！？」

亜紀「うーん・・・沢の前つて何て読むの・・・・かな！？」

亜紀「あつ！-いけない、いけない、自分の名前探さないとーーー。」

亜紀「・・・・・あつた、なんだ私もB組か！？」

亜紀（変わった名前の子と一緒にやん）

亜紀『それでね、そのころのお母さんはまさか変わった名前の男の子に恋をするなんて思つてもいなかつたの』

子供「それがお父さん？」

亜紀『そうだよ』

私は自分の教室に向かつた

亜紀（ああー、さつきの名前で緊張なくなつたと思つたのに、また、緊張してきた）

? ? 「ねえー、もしもーし」

亜紀「はあーーー」

? ? 「ねえーてばつ！！！」

亜紀「・・・・・えつ！-?あ、ごめんなさい。なにか用ですか？」

? ? 「何か用ですかじゃなによーーー」

? ? 「人がせつかく友達にならと思つて話しかけてんのに、元気ないつすなー・・・それもそつか、なれない環境だもんねーーー何！？中学ん時の友達とかいないの！？」

亜紀「え・・・・うん。私、今年引っ越ししてきたから・・・・・」

? ? 「へえー、あつ！-まだ自己紹介してなかつたねつ！」

? ? 「私は秋田　こまち（あきた　こまち）つて言つのよひじくーーー！」

亜紀（どつかで聞いたことある名前だなあ）

亜紀「えつと私は橋田　亜紀つて言つのよひじくーーー。」

こまち「o-k!-じゃあこれから亜紀つて言つね

「こまち「私のことこまちって言つて！…」

亜紀「う、うん わかった。」

こまち「私の席は亜紀の前だからね…」いつでも、話しかけてくれ  
ていいから

亜紀『すごく変わった名前でしょ！？お米の名前だからびっくりし  
ちゃつたけどすごく優しくて頭がよくて今は有名な会社で働いてる  
の』

子供『でも、お米の名前はないよ』

先生「ほらあ、お前ら席につけッ！…体育館に行く前に出席とするぞ  
亜紀（始業式なんだから、みんな来てるじゃん…。）つと思つ  
ていると

先生「濤沢！…濤沢龍！…いなかー！ふつい、昨日の入学式に  
は来てたのに、もう欠席かあ…・・・まつたく…！」  
亜紀（濤沢！？うへんどうかで聞いたことがあるような…・・・ない  
ような…・・・濤沢・・・龍・・・・。）

亜紀「あっ！…思い出した。変な名前の人だあ」

亜紀「へえ、なみつて読むんだ…・・・。」

1人でボソボソ言つていると、

こまち「ねえ、亜紀！濤沢と知り合いなの！？」

亜紀「えつ！…ち、ちがうよ！…変わった名前の人だなあーつて思つ  
ただけ」

こまち「ふーん」

先生「よーし、みんな時間になつたから体育館行くぞ」

亜紀『そのころは何も思わなかつたけどそのころからお母さん、お  
父さんのこと好きだつたのかもしけないね』

子供『早く続きを教えて』

亜紀『はい、はい それで』

亜紀「やつと終わつた」

こまち「亜紀、学校終つたからせ、どつか遊びにいかない？」

亜紀「いいよ、どこに行く」

こまち「うーん」

亜紀「初めて友達になつたからゲーセンでプリクラとらない？」

こまち「いいね ジャあ行こう」

亜紀「でも、こっち来たばっかりだからビリヤードゲーセンあるかわからんない・・・」

こまち「大丈夫 教えてあげる」

亜紀「ありがとう」

私はこまちに連れられてゲーセンに行つた

亜紀「大きいゲーセンだね」

こまち「そうでしょ プリクラだけで何台もあるんだから」

亜紀「へーそななんだ」

こまち「早く撮りに行こう」

亜紀「う、うん ちょっと待つてよ」

私はこまちと何枚もプリクラを撮つた。

こまち「たのしかつたね」

亜紀「うん」

こまち「あ、あれ取りたかつたんだ」

亜紀「かわいい ぬいぐるみ」

私とこまちは、かわいいぬいぐるみの前に立つて100円を入れて何度もやつた

こまち「なかなか取れないね」

亜紀「う、うん」

こまち「亜紀やってみてよ」

亜紀「わ、分かつた 取れるかどうかわからんないよ

私がやろりとしたとき知らない男の子が

??「ちょっととかしてみ

亜紀「えつ？」

その男の子は黙々と100円を入れて黙々とぬいぐるみを取つた

亜紀「す、すごい」

こまち「何回やっても取れなかつたのに・・・」

男の子が去る「う」としたので

亜紀「あ、あの名前聞かせて下さー」

男の子は黙つてどこかに行つてしまつた

こまち「す」「かつたね」

亜紀「う、うん」

こまち「そりそろ帰らう」

亜紀「うん また、明日学校でね」

こまち「うん バイバイ」

私は家に帰つた

— 高橋家 —

亜紀「ただいま～」

つと黙つて靴を脱いで部屋に入った

お母さん「おかえりなさい」

お母さん「おそかつたのね」

亜紀「友達と遊んでたの」

お母さん「もう、友達できたの? ちよつと安心したわ」

お父さん「おかげり」

亜紀「ただいま」

お父さん「高校はどうだった?」

亜紀「楽しかったよ」

亜紀「今田ね友達と一緒にプリクラ撮つたんだ」

お母さん「そうなの よかつたわね」

お母さん「お名前は?」

亜紀「秋田こまちって黙つの」

お母さん「秋田・・・」(まづい?)

亜紀「どうかしたの」

お母さん「あははは秋田こまちってははは」

亜紀「お母さんどうかしたの?」

お母さん「秋田こまちってお米のなまえじやない」

亜紀「え?」

お父さん「え？」

亜紀「ほんとだ～」

家族は爆笑に包まれた

（翌朝）

私は気持ちよく目が覚めた

支度をして「はんを食べて学校へ行つた

（教室）

こまち「おはよう

亜紀「おはよ～」

こまち「昨日は楽しかったね」

亜紀「うん

チャイムが鳴り響く

先生「席につけ～」

先生「出席とするわ」

先生「おつー今日は来てるじゃないか！？濤沢」

亜紀（濤沢ってどんな子だろ？）

私は濤沢のほうを見たとき

亜紀「あ～～～！」

こまち「あ～～～～！」

私とこまちが一緒に声を出していた

先生「お前ら一人どうしたんだ？」

亜紀「な、な、何でもありません」

こまち「す、す、すみません」

こそこそ話で

こまち「ねえ亜紀 あの男に子つて昨日の子だよね

亜紀「う、うん 見間違いじゃないでしょ

こまち「だ、だよね」

先生「授業はじめんぞ～」

（50分後）

亜紀「やっと終わった」

「まち「やつとだね」

こまち「濤沢つてさ以外にかつこいいよね」

亜紀「そつかな」

濤沢のほうを見ると女の子に囲まれていた  
女の子集団「濤沢く〜ん濤沢く〜ん」

子供『昔からお父さんはモテモテだったんだね』

亜紀『そうだよ』

男の子集団「濤沢 すごいよな 女にもててもじょん」

こまち「あれはすごいね。亜紀」

亜紀「う、うん」

～放課後～

こまち「やつと終わつたね」

亜紀「うん。疲れた」

こまち「今日はそのまま帰ろうかな？」

亜紀「今日はそのまま帰ろうかな」

亜紀「うん、バイバイ」

私は自転車に帰っていると

自転車に足が絡まつてこけてしまった

子供『そのころからお母さんどんどんくさかつたんだね』

亜紀『う、うるさいな』

私はあわてて立ち上がりつて自転車を持ち上げようとしたときに

自転車を持ち上げてくれた人がいてお礼を言おうとしたときに

濤沢だった

亜紀「あ、濤沢君 あ、ありがとう」

濤沢「大丈夫か！？」

亜紀「大丈夫 ありがとう」

亜紀「それと昨日はありがとう」

濤沢「昨日？」

亜紀「ぬ、ぬいぐるみ」

濱沢「あ～あ　どういたしまして」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6176z/>

---

私が彼と結婚した理由

2011年12月20日19時52分発行